

## 一研究者の視点からの「提言」

“Recommendations” from the view of a researcher

市川 義則\*

最初に、今回の招へいでお世話になりました JAL 実行委員会、とりわけ東京国立近代美術館の水谷長志さん、事務局の大橋直美さん、訪問を受け入れてくださいました諸機関の皆様方にお礼申し上げます。

今日の発表に関してプロジェクト事務局より、「自己紹介および職場紹介」、「JAL に参加しての感想および今後への希望」、「日本美術の情報発信力向上のための提言」の 3 点をという指示がありましたので、この順番で話を進めます。

まず小生の自己紹介から始めます。

1969 年東京生まれ。大学在学中から司書課程を履修して、学部 4 年の秋に公務員試験合格。卒業とともに東京大学文学部図書室に就職。学問への情熱も捨てがたく、夜間大学院に入学して研究を進めました。

昼間与えられた仕事が司書職とは程遠い事務の仕事であったことにとまどいを覚え、また海外留学向けの奨学金を受給したことを契機に 2 年半勤めた東京大学を退職して、留学生として渡仏しました。

1998 年に東京に戻って修士論文を仕上げた後、研究のため再渡仏。2000 年に現職に就き、今日に至っています。

私が司書課程履修時に「よき図書館人は、よき研究者たれ」という教えを受け、以来「研究者と資料提供者の垣根は低くなるべき」という信念を持って、職務の傍ら研究活動を行ってきました。

表題が示す通り、本発表も図書館員というよりも、美術を中心とした人文科学研究者からの視点

のものになるでしょう。

日本館図書室に勤めてしばらくして、古い蔵書の中にパリ日仏協会 (Société franco-japonaise de Paris) 所蔵の資料を発見以降、この団体が活動した時期の日仏関係に興味があります。現在の研究課題は、パリ日仏協会から派生して 3 方向に向かっています。

- ① 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて欧米諸国と日本の間には多くの二国間関係団体ができています。お雇い外国人や日本からの留学生の研究は多くありますが、これら二国間団体はあまり知られていないように思えます。拙論は日本語とフランス語で二本あります。

「明治期後半における日仏関係—パリ日仏協会を中心として—」

[http://www.jpf.go.jp/j/intel/exchange/organize/eeja/report/09\\_10/pdf/09\\_10\\_08.pdf](http://www.jpf.go.jp/j/intel/exchange/organize/eeja/report/09_10/pdf/09_10_08.pdf)

*La relation franco-japonaise avant la Deuxième Guerre mondiale à travers des sociétés franco-japonaises*, Makiko ANDRO-UEDA & Jean-Michel BUTEL (dir.) : *Japon pluriel 9*, Philippe Picquier, 2014, p. 353-361.

- ② 第一次世界大戦まで、パリ日仏協会はジャポニズムの流れを汲んだ日本美術愛好家で占められていました。日本美術の情報は、国境を越えて欧米の収集家の間で共有されていました。そこで当時の美術品の流れや、欧米における日本美術研究の動向について興味があります。

*Le japonisme et la Société franco-japonaise de Paris*, Patricia PLAUD-DILHUIT (dir.) : *Territoires du japonisme*, Presses

\* いちかわ よしのり (パリ国際大学都市日本館図書室司書, Ichikawa Yoshinori, Librarian, Maison du Japon Cité Internationale Universitaire de Paris)

Universitaires de Rennes, 2014, p. 117-130.

- ③ 欧米で日本美術熱が下火になると、日本人画家が欧米で活躍するようになります。時代的には②の延長として、最近興味が出てきている主題です。

次に当方の職場を紹介します。

パリ国際大学都市は、フランスの文部大臣アンドレ・オノラが第一次大戦後に提唱しました。その功績を記念して、大学都市内には胸像が建てられています。パリの南端に位置し、約 34 ヘクタールの敷地に 40 の建物があり、140 ヶ国から 5,600 人の学生・研究者を受け入れています。

それらの建物のひとつである日本館は、日本の城をイメージした三角屋根の建物で、設計はフランスの建築家ピエール・サルドゥーです。建設には薩摩治兵衛、治郎八父子が私財を投じ、1929 年 5 月に開館しました。

館内には藤田嗣治の作品が 2 点あります。玄関正面に飾られている「馬の図」と大サロンの舞台奥にある「欧人日本へ渡来の図」です。

館内地階にある小さな図書室が私の職場になります。スタッフは私ひとり。主な利用者は日本人の留学生や研究者、フランス人の日本研究者、大学都市の居住者です。

図書室のコレクションは和書 7 千、洋書 3 千冊。日本の学術雑誌を 150 ほど受贈しています。ジャポニズムやアールヌーヴォーに重要な役割を果たした美術商ビングが出した雑誌「芸術の日本」も所蔵しています。パリ日仏協会の蔵書印とともに、ビング自身の献辞も入っています。

続いて JAL2014 に参加しての感想についてお話しします。

10 日間、世界中の同僚から刺激を受けながら過ごせたことは大変有意義であり、今後のキャリアに生かしていきたいと思えます。

ひとつ苦言を述べさせてもらえば、プログラムの中で興味深いデータベースの説明がありましたが、一方的な解説よりも参加者も利用しながら体験できる、双方向的な実習のほうがよかったです。ではという気がしています。

訪れた多くの図書室では、利用者がインターネットに接続できないことに驚きました。新聞などで、外国とは違い日本の公共の場でネットにつながらない問題は聞いていましたが、研究の場であるはずの図書室でウェブ環境が整備されていないことには、利用者から苦情が出ないのか疑問に思いました。

また訪問先では対話の重要性を再認識しました。とりわけ東京文化財研究所は意見交換のために、多くの職員の方を集めて我々の訪問を待っていてくださいました。

プログラムで 10 か所以上訪問しましたが、個人は初めて名刺を交わしたのは国立新美術館と奈良国立博物館くらいでした。その他の機関の方とは、日本資料専門家欧州協会などで顔を合わせています。これらの点は、以下の「今後の希望」と「提言」でもう少し発展させます。

「今後の希望」については、まず対費用効果という点から、外国から招聘することが適切であろうかと思いました。我々 7 人を渡航させて 2 週間近く宿泊・旅行させるならば、日本から数名の専門家を欧米に派遣して、現地の多く（7 人以上）の関係者を集めて、数日間の講習や研究会を開くこともできるのではないのでしょうか？これにより現地に根付いた、より大規模なネットワークが構築できるのではと考えます。そのような機会があれば、非力ながらヨーロッパの核のひとつとして協力していきたいと思っています。

最後に大きく分けて 2 つの提言をさせていただきます。

まず「実際の対話を通じたネットワークの一層の強化」を申し上げたい。

欧米に散在する日本美術品のように、日本美術関係の機関や研究者は各国にあります。お互い存在は知っていても、対話の機会は年に1度くらいです。何もしなければ人間関係は時とともに薄らいでいくわけで、維持・強化の努力が必要でしょう。定期的にセミナーやコンフェランスを開催していけば、グループ内での交流が深まり、自ずと美術資料の情報発信力強化につながると考えます。Japan Art History Forumなどの活動を通じて「提言2」に向けて交流を盛んにしていくことを提案します。

私を知る一例として「アール・ヌーヴォー・ネットワーク」について簡単に説明します。詳しくは英語ほかのホームページをご覧ください。

1999年ブリュッセル首都圏の歴史文化遺産を担当する部局が提唱して始まったこのネットワークは、現在全欧で10ヶ国、20ほどの自治体やその所属機関が参加しています。財政的な支援は欧州連合が行っています。

「提言1」が主にウェブを媒体としたネットワークであるのに対して、「提言2」は、その拠点となる「ハコ」を欧米現地に作ろうというものです。前の提言よりは予算が必要になりますが、ネットワークの中心が明確になり、確かな発信力

が期待されます。

日本の国際交流基金は、公衆対象の文化紹介から専門家の研究交流までを幅広く行っていますが、そのすべてを任せるのには無理があるでしょう。

非常に盛んな独仏間の学術交流の一端として、パリには「ドイツ美術史研究所」とでも訳すべき機関があるので紹介します。

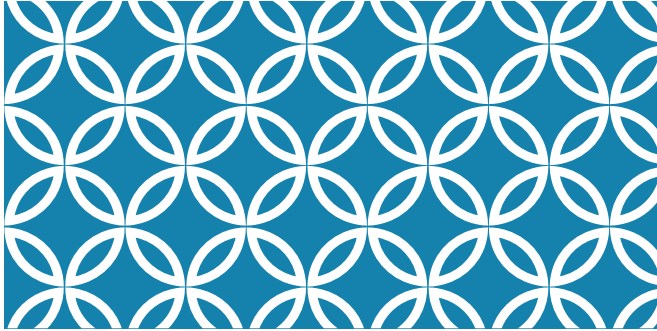
こちらにも英独仏語のホームページがあるので、詳細はこちらをご覧ください。

1997年にドイツ連邦政府の資金でドイツの美術史家により実験的に設立され、2006年以降ドイツ海外学術研究所財団の傘下に入っています。

所長以下、事務員などを除いて、みな学位を持つ研究者で、研究プロジェクトの立案、奨学金の給付、出版などが、活動の柱です。

以上で発表を終わります。

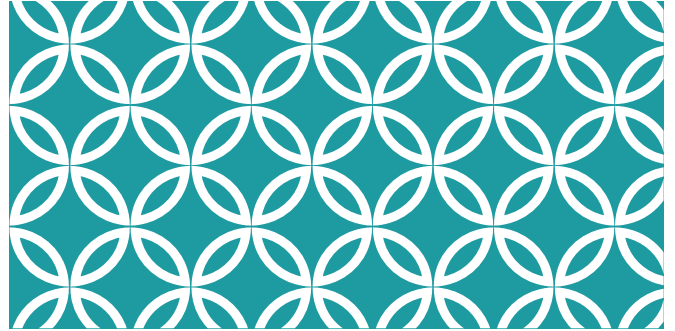
最後に聴衆の皆様、ご清聴ありがとうございました。



一研究者の視点からの「提言」  
"RECOMMENDATIONS"  
FROM THE VIEW OF A  
RESEARCHER

パリ国際大学都市  
日本館図書室  
司書 市川 義則  
ICHIKAWA Yoshinori  
Librarian, Maison du Japon  
Cité Internationale  
Universitaire de Paris

1



招聘者及び職場紹介

2

学歴・職歴

- 1992年 国家公務員試験図書館学合格
- 1993年 早稲田大学教育学部卒  
司書資格取得
- 1993-95年 東京大学文学部図書室
- 1998年 法政大学大学院人文科学研究科  
修士課程修了
- 2000-年 パリ国際大学都市日本館  
図書室司書

3

現在の研究課題

- 「よき図書館人は、よき研究者たれ」  
→ **研究者と資料提供者の垣根は低くなるべし。**
- パリ日仏協会 (Société franco-japonaise de Paris: 1900-1932?) を中心とした日仏関係  
→ **倫敦日本協会 (1891-)、日白研究会 (1906-?)** などの在欧日本関係団体  
→ 20世紀初頭、欧米における**日本の美術品や美術研究の拡大**  
→ 20世紀前半、パリで活躍した**日本人画家**

4

パリ国際大学都市  
CITE INTERNATIONALE  
UNIVERSITAIRE DE PARIS

フランス文部大臣**アンドレ・オノラ (André HONNORAT : 1868-1950)** が戦間期に提唱。

高等教育機関で学ぶ主に留学生のために**パリ南端**の14区に創られた学生寮群。

今日、**34ヘクタール**の敷地に、**約40館、140カ国**から**5600人**の学生、研究者が居住。



5

パリ日本館 MAISON DU JAPON

地上7階、半地下1階

日本の城郭を模す

フランス人建築家 **ピエール・サルドゥー (Pierre SARDOU : 1873-1952)** 設計

**薩摩治兵衛 (1881-1958)**、

**治郎八 (1901-76)** 父子が私財を投じて建設

1929年5月開館

**藤田嗣治 (1886-1968)** 作品2点を所有

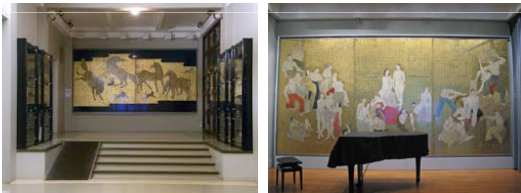


6

## 館蔵、藤田嗣治作品

「馬の図」

「欧人日本へ渡来の図」



7

## パリ日本館図書室

日本館開館と同時に設置  
司書 1 人  
面積約 3.6 平米  
利用者数平均 5 人/日  
主たる対象  
日本人留学生・研究者  
日本研究者  
大都市市居住者



8

## パリ日本館図書室蔵書

日本に関する図書

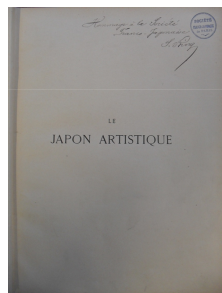
和書 7 千冊

洋書 3 千冊

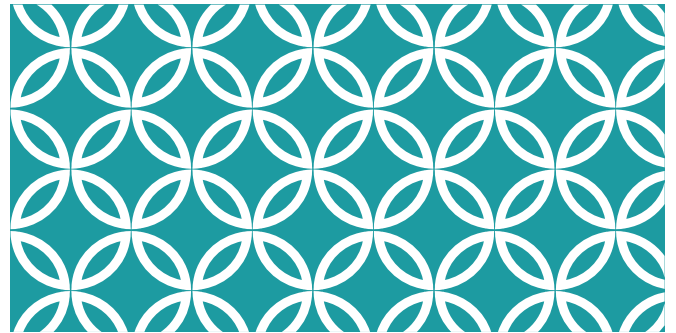
学術雑誌 150 タイトル

パリ日仏協会図書室の蔵書を  
引き継ぐ

右は日仏協会員、サミュエル  
(ジークフリート) ピング  
S. BING の献辞入り「芸術の  
日本 le Japon artistique」



9



JALに参加しての感  
想および今後への希望

10

## 感想

10 日間、世界中の同僚と過ごせたのは有意義であった。

訪問先の多くの図書室でネットに接続できないことが驚き。

招聘者向けの説明で、多くの興味深いデータベースが紹介されたが、実習という形で試行できなかったのは非常に残念。

訪問先での対話の重要性。

多くの職員と時間をとって意見交換ができた東文研。

10 近くあった訪問先のうち、初めて名刺を交わしたのは新美、奈良博くらい。

それ以外は日本資料専門家欧州協会 (EAJRS) 等で会っている。

11

## 今後への希望

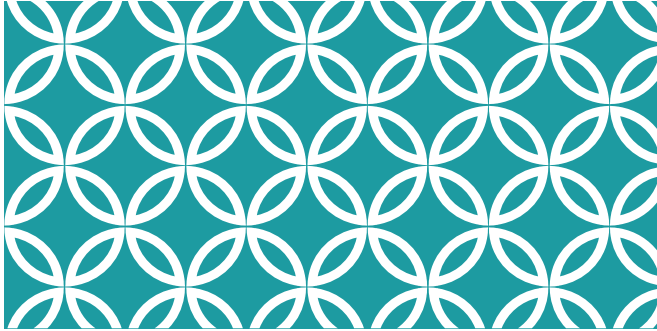
コストパフォーマンスという観点から、外国から日本美術資料専門家を招聘することが適切であるか？

7 人を日本へ渡航させて 2 週間近くにわたり宿泊・旅行させる費用で、ヨーロッパ及びアメリカにおいて日本から数人の専門家を派遣、現地で 7 人以上の専門家を集めて、数日間の講習や研究会ができるのではないかと？

そうならば現地に根付いたネットワークを、より大規模に構築、促進できるのではないかと？

今回、招聘された私 (達?) は、その核になるべきではないかと？

12



## 「提言」

13

## 提言 1 実際の対話を通じたネットワークの一層の強化

外国に散在する日本美術資料品のように、日本美術の専門家関係機関は各国にいる。

お互いの存在は知っていても、**対話の機会**は少ない。

ネットワークは**維持、発展**させていく必要がある。

定期的に**講習**や**研究会**を開催することでグループ内の交流が深まり、それが美術資料の情報発信強化につながる。

**Japan Art History Forum**などを「**提言 2**」に向けて強化する。

アール・ヌーヴォーには、全欧の20以上の機関が集い「アール・ヌーヴォー ネットワーク」が作られている。

14

## RÉSEAU ART NOUVEAU NETWORK

<http://www.artnouveau-net.eu/>

(英・仏・独・伊・蘭など11ヶ国語のHPあり)

アール・ヌーヴォーの研究やその振興、また保存を目的に一般や専門家向けや展覧会、出版、シンポジウムなどの活動をヨーロッパ連合の財政援助のもとで行なっている。

1999年ベルギー、ブリュッセル首都圏の歴史文化遺産を担当する部局が提唱。

フィンランドのヘルシンキからスペインのバルセロナ、イギリスのグラスゴーからハンガリーのブダペストまで10ヶ国20ほどの自治体に参加。

15

## 「アール・ヌーヴォーネットワーク」の活動

### Network Newsより抜粋

**Online activities Art Nouveau and Nature** soon available on **our Website!**

**Exhibition** Ways to Modernism at the MAK in **Vienna** – from 17 December 2014 to 14 April 2015

**Call for papers** II coupDefouet International Congress in **Barcelona** – from 25 to 28 June 2015

**Exhibition** Lechner, A Creative Genius at the Museum of Applied Arts in **Budapest** – from 19 November 2014 to 31 May 2015

**Exhibition** The Norwegian Japonism at the Jugendstilcenteret in **Alesund** – from 26 September 2014 to 7 April 2015

16

## 提言 2 (仮称) 在欧・在米日本美術研究所の開設

「提言 1」のネットワークは、HPの下に組織や研究者が集う仮想上の、ヴァーチャルなネットワーク。

その維持・発展のために、**定期的な対話**は必要。

一歩進んで、実際に**学術研究網の核**となる「ハコ」を作る。

日本の国際交流基金に、公衆規模の文化交流から**専門家の研究交流**までを任せるのには無理がある。

独仏両国の交流は**研究者同士は独自の機関**を通じて進められており、パリには「ドイツ美術史研究所」とでも訳すべき組織が存在する。

17

## DEUTSCHE FORUM FÜR KUNSTGESCHICHTE / CENTRE ALLEMAND D'HISTOIRE DE L'ART

<http://www.dtforum.org/>

(英・独・仏語のHPあり)

**独仏間の美術および美術史への関心**を高め、それら**研究の相互推進**。

1997年独連邦文部省の資金により**パリにドイツ美術史研究所**が実験的に設立。

設立者**ドイツの美術史家Thomas W. GAEHGTENS** (1940-)が2007年まで所長を務める。

GAEHGTENSは現在Getty Research InstituteのDirector。

2006年以來研究所はドイツ海外学術研究所財団 Max Weber Stiftung の傘下に入る。



18

## 「ドイツ美術史研究所」

### 組織

所長 1人 / 副所長 1人  
研究主任 6人  
研究員 4人  
仏語出版担当 1人  
独語出版担当 2人  
ウェブ出版担当 1人  
図書室 4人  
事務員 3人 / IT担当 3人

### 活動

当研究所の中世から現代までに関する**研究プロジェクト**、**奨学金プログラム**や様々な**出版物**に世界中の研究者が集う。

研究所は博物館・美術館、大学などの**研究機関と共同**して、**展覧会**の企画、公開講座や**研修旅行**を実施する。

毎年決められる**年間テーマ**は、学会の**最新動向**を踏まえたものである。

19



yoshinori.ichikawa@laposte.  
net

ご清聴ありがとうございました。

20